

南都禰宜衆の面打

MIYAMOTO, Keizō / 宮本, 圭造

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute
of Hosei University

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

NOGAKU KENKYU : Journal of the Institute of Nogaku Studies / 能楽研究

(巻 / Volume)

46

(開始ページ / Start Page)

65

(終了ページ / End Page)

81

(発行年 / Year)

2022-03-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00025660>

南都禰宜衆の面打

宮 本 圭 造

はじめに

中世から近世初期に活躍した面打の中には、僧籍を有するものが少なくなかった。世襲面打家の出目家・井関家と系譜上の繋がりがある越前の三光坊や近江の大光坊をはじめ、戦国期に活躍した平泉寺の財蓮坊、桃山期に活躍し、豊臣秀吉から「天下一」の称号を授かった醍醐日野法界寺の角坊、さらには『大野出目家伝書』や『面打秘伝書』に名前のみ見える興福寺の般若坊・智恩坊・吉常院など、枚挙に暇がないほどである。彼らの中には、大光坊や角坊のように、能面のみならず仏像の制作をも手掛けたことが知られる人物もおり、寺院における仏像制作をめぐる環境が、同時に能面制作の温床ともなっていた事実を物語っている。一方、神社の周辺には、能面史に名前を残す人物がほとんど見られない。神社においては神像彫刻の工房がほとんど発達を見なかつたことが主たる要因であろうが、その数少ない例外といえるのが、これから述べようとする南都春日社の禰宜衆による能面制作の事例である。

南都春日社の下級神職である禰宜衆は、中世末から近世初期にかけて旺盛な演能活動を展開した。その様相については、拙稿「南都禰宜衆の演能活動」(『上方能楽史の研究』(二〇〇五年、和泉書院)所収)で詳述した通りであるが、南都

春日社の禰宜衆が能面制作を手掛けるようになったのも、彼らの演能活動の活発化と密接に関わっていると考えられる。以下、春日社の禰宜衆の可能性が想定される面打として、宮野・野田新助・大宮大和・梅岡次郎兵衛の四名を取り上げ、その事跡と実作例を見ていくことにしたい。なお、本稿は面打の伝記に関する筆者の一連の研究^(注1)に連なるものである。

〔宮野〕

宮野は、『大野出目家伝書』『仮面譜』が「中作」の一人として挙げる面打で、『大野出目家伝書』は「奈良若宮社人」、『仮面譜』は「南都若宮ノ社人」とする^(注2)。これを信ずれば、南都春日若宮社の神職であったということになる。南都春日社は大宮社と若宮社とから成り、大宮社には中臣姓の正預方と大中臣姓の神主方、若宮社には千鳥姓の若宮神主方の社家がいた。その支配下にそれぞれ組織されたのが南郷方・北郷方・若宮方の三方禰宜で、宮野はこのうち若宮方の禰宜であったと思われる。しかしながら、禰宜関係の資料には「宮野」姓の禰宜を見出せず、いまだその真否は不明である。

喜多古能が『面目利書』で「慥なるものを見ず、論しかたし、尤印判名等彫付ある事なし^(注3)」と述べるように、宮野の現存作例は少ない。管見では、京都の野村美術館に「宮野作」と刻銘のある怪士、スイス・チューリッヒのリートベルク博物館に「宮野作」と墨書のある怪士が所蔵されているのを知るのみである。なお、斎藤香村「能面使用別(八)」(『謡曲講座』第二期第八輯(一九二八年、謡曲講習会)に、「宝生大夫家には古くから宮野作の髭癭見を秘蔵して居る」とあるが、これについてはいまだ調査の機会を得ない。もともと、上記の怪士二面も、面裏の銘記がかたや刻銘、かたや墨書銘と一致せず、いずれが真作であるのか、あるいはそのいずれもが真作であるのか、ないのか、はっきり

しない。刻銘・墨書銘の筆跡も同一人によるものかどうか疑問であり、作風にもあまり共通性が認められない。リートベルク博物館の怪士はやや生硬な彫刻で、作としても劣っており、宮野作に仮託した別人の作であろうか。一方、野村美術館蔵の怪士は、眉間の緊縮を刻み、また、コメカミ部分を窪ませて頬骨を強調する立体的な表現が見事で、なかなか優れた彫技を見せる。こちらが宮野の真作であると考えたい。材は桐。面裏に「宮野作」の刻銘のほか、「元禄三年午／香取分出ル 三光作」の朱漆書が見える。「香取」は春日社とも関係の深い下総の香取神宮か。この面が「三光作」とされた理由は定かではない。

〔野田新助〕

野田新助の名前が文献に現れる最初は大蔵虎明の『わらんべ草』で、面打に関する記述中に「野田新助 秀能井と名を打つ、是は狂言面打」と見える。この記事は、寛文十一年（一六七〇）頃成立の『面之書』、喜多古能の『仮面譜』にもほぼそのまま踏襲されており、例えば『仮面譜』には、「中作以後」すなわち「太閤時代」の面打として、「野田新助 秀能井ト彫附アリ」とある。もともと、喜多古能自ら『面目利書』に「たしかなる物を見ず、論しかたし」と記しており、野田新助が「秀能井」の刻銘を用いたという点も、秀吉時代の面打であったという点も、即座に信じるわけにはいかない。

現在、野田新助の唯一の作例として知られるのが、奈良吉野・天河神社蔵の小面である。万媚を思わせる艶やかな表情の女面で、面裏は幅の均一な横方向の刀目で整えられ、次のような朱書による銘を記す。

願主

奉寄進
新輔

天河弁財天女社

寛永五^辰十月十二日

秀能井 時守

市守

右の朱書銘は、寛永五年（一六二八）、「新輔」が願主となつてこの面を天河社に寄進した由を伝えている。ここで問題となるのは、銘記の末尾に名前が見える秀能井時守・市守と「新輔」との関係で、これについては幾つかの可能性が想定されよう。すなわち、①「新輔」はこの面を寄進した願主であり、秀能井時守・市守はその寄進の仲介を果した人物であるという可能性、②「新輔」は秀能井時守・市守（のいずれか）と同人であり、同時にこの面の作者でもあるという可能性、である。このうち、①は「新輔」が秀能井時守・市守とは別人と考える立場だが、その場合も、「新輔」が右の面の作者である可能性、あるいは秀能井時守・市守（のいずれか）が作者である可能性の両方が想定される。後藤淑『中世仮面の歴史的・民俗学的研究』（一九八七年、多賀出版）は、「新助が寛永五年に、なお生存していたことが知ることをでき、「秀能井^{時守}市守」といつていたことも確かめることができ」とするが、これは『わらんべ草』が「野田新助 秀能井と名を打つ」と記すのに拠つたもので、時守と市守という二つの名前が書かれていることに関しては度外視している。

この秀能井時守・市守が南都春日社の禰宜であったことについては、前掲拙稿「南都禰宜衆の演能活動」の注(3)にすでに触れた通りである。すなわち、春日社禰宜諸家の系図『家系』（梅田保氏蔵）によれば、秀能井家は春日大宮の神主方に従属する北郷方の禰宜で、平安後期の永延二年（九八八）に春日社の附属となつた藤原清貞の三男清景に始まる家系という。秀能井時守はその二十四代目にあたり、慶長四年（一五九九）に禰宜入職、正保四年（一六四八）の没で

あった。一方の市守は、時守の弟であることが、卜部吉田家出身の僧神龍院梵舜の日記『舜旧記』から知ることが出来る。秋元信英「中世の春日社神殿守をめぐる法と制度」(『国学院大学日本文化研究所紀要』二十九号、一九七二年)が紹介する大宮家蔵『春日藤原禰宜系図』乙本には、秀能井時守の次代乗守が十三歳で早世し、その後を時守の弟の主膳正存守が継承した由が見えるが、この存守の初名が市守で、前記『家系』が伝えるところによると、存守(市守)の没年は寛文十年(二六七〇)という。なお、『舜旧記』には秀能井時守・市守の名が頻出し、神書の貸し借りを通じて梵舜と親しく交流していた様子が記されている。以下、その記事の一部を挙げておきたい。

予留守ニ、南都野田村之禰宜藤屋主膳上洛、餉桶一ツ・油煙一包一丁・円柿二袋持来也、去々年上洛之時、約束神書之内、元々抄五冊持上也、連々及聞一覽申度由申入、依テ如此也、依留守懇ニ申置候也(元和八年一月二十八日条)

奈良藤屋民部少輔ヨリ餉一桶・円柿一袋、同藤屋主膳、法論味噌一桶、書状ニテ来也、泰山府君之次第・同絵図一枚・護摩次第二ツ指上也、予為返礼、茶之帯一筋・扇二、民部方遣也、主膳方へムラサキ帯一筋・扇二遣也(元和九年一月二十四日条)

奈良之藤屋民部所ヨリ柿一籠来、書状添也、太麻之事・木綿襦・日本書紀之事尋来也、泰山府君之不審七ヶ條尋来、当家之事無ニ依テ不調之由申遣也(元和九年閏八月二十一日条)

南都奈良禰宜之内、藤屋民部少輔書状・団扇一ツ・茶碗箱入二、同舍弟主膳佑団扇一ツ・書状来也(寛永元年六月二十八日条)

南都藤屋民部少輔時守・舍弟主膳正市守、中臣祓依所望両卷書之也、并奥書迄申来候間、乍斟酌書之也(寛永四年八月十九日条)

南都秀能井主膳正并民部少輔令返事、元々集兩冊返進也、中臣祓二卷依所望、予写遣也(寛永四年九月十五日条)

奈良秀能井主膳来、籠栗・油煙二挺、舎兄、油煙二挺来也、晚食申付、小護摩次第持来也(寛永五年十月二十五日条)

南都秀能井民部少輔上洛也、油煙一挺、弟主膳ヨリ書状来、油煙一挺来也、則民部へ及面談、晚食・御酒差了

(寛永六年一月二十八日条)

南都ヨリ秀野井兄弟ヨリ音信、民部少輔、諸白檯長檯一ツ・团扇一ツ、弟主膳ヨリ团扇一ツ来也、今度始而大神主職永代預リ之由申来也、次予為返礼扇五箱入、民部へ遣也、同弟主膳へ踏皮一足遣也、使者急下候由依申、少返礼也(寛永六年七月十日条)

已刻ニ奈良禰宜秀能井民部上洛也、油煙一挺・アメ一桶、大和社縁起持来也、舎弟主膳ヨリ南都小檯一ツ上也、依客来返事ニ不及皆帰也、乍去及対面、暫雜談共也(寛永六年十一月十四日条)

南都秀能井民部少輔上洛来、团扇一本持来也、舎弟主膳ヨリ团扇一本来也、則振舞申付、相伴也、今日奈良へ下之由候間、主膳方へ返礼トシテ錫棗一ツ遣也、民部へハ硯水入壺ツ・金ノハリコ一ツ添遣也、折節之刻、不及是非体也、次民部依所望供米・散米要文書也、則宗源行事之内、供米之文書遣也(寛永八年七月五日条)

南都藤屋民部少輔依上洛来也、油煙二挺持参、弟主膳ヨリ油煙二挺来、民部晚食俄令用意、相伴也(寛永八年十月六日条)

南都春日禰宜之内、秀能井民部少輔方書状来、飴一桶、并舎弟主膳方、飴一桶来(寛永八年十二月十九日条)

南都之社家秀能井主膳ヨリ依所望、書遣分也

参詣之次第

神前

庭上二円座^{エンサ}

次両段 再拝 次中臣祓一座

次再拝 次退下

以上

寛永八

神龍院

十二月十九日

龍(花押)

秀能井主膳方申来、此方注遣也(寛永八年十二月二十九日条)

右のうち、秀能井(藤屋)民部少輔とあるのが兄の時守、主膳正とあるのが弟の市守である。寛永四年八月までは「藤屋」姓として見えるが、翌九月以降は、寛永八年十月六日条に一例だけ「藤屋民部少輔」とあるのを除き、全て「秀能井」姓で記されている。寛永四年九月頃、「秀能井」と改姓したのであるか。寛永五年十月の年記がある天河神社蔵小面に「秀能井」と署名が見えることも矛盾しない。『舜旧記』には、秀能井時守・市守の名がほぼ毎回、セットで登場する。二人がしばしば行動を共にしていた事実を物語つていよう。秀能井兄弟が神書制作の場においても共同する機会が多かったことは、森本仙介「『三要記』の成立とその背景をめぐって―17世紀、春日禰宜による神書制作の一端」(『神道宗教』一七五号、一九九九年、神道宗教学会)が明らかにしている。天河神社蔵小面の銘記に秀能井時守・市守の二人の名前が並んで見えるのも、天河社への面寄進が兄弟による共同作業であったことを示すものなのである。であるならば、この面の制作もまた、二人が共同して行ったと見るべきなのであるか。しかしながら、私はその可能性は低いのではないかと考えている。というのも、朱書銘に記される「新輔」の名乗りが、秀能井時守のものとも、市守のものとも、いずれとも見なし難いからである。『舜旧記』によれば、寛永五年当時、秀能井時守は

民部少輔、市守は主膳正を名乗っており、朱書銘にもその官名を用いた可能性が高い。すなわち「新輔」は、秀能井時守・市守とはまた別人と見るのが自然なのである。

もつとも、「野田新助」「新輔」と秀能井家とが全く無関係であったというわけではない。『わらんべ草』は、野田新助作の面に「秀能井」の銘記（それが刻銘であるのか墨書銘であるのかは不明ながら）があることに言及している。その面が天河神社蔵の小面とはまた別のものであったと考えられる以上、「秀能井」と銘記した野田新助作の面が他にもあったのは確かだからである。実際、法政大学能楽研究所が所蔵する金剛座ツレ長命家の伝書『秘書』（江戸後期頃）には、「面時代年数覚」「金剛代々家面作者附」の記事に続き、「一、秀能井、春日神人、野田住、狂言面打」という一条が見え、春日社禰宜の秀能井が狂言面を打ったことを伝えている。これが野田新助と同人であることは、右に「野田住」とあることからまず間違いないところであろう。つまり、秀能井姓の面打は確かにいたのであり、それが野田新助と同人であった可能性はやはり高いということになる。

先にも記したように、春日社の禰宜は南郷方・北郷方・若宮方の三方に組織された。このうち、北郷方の禰宜は野田村に住んだため、野田禰宜とも称し、名乗りにも野田を姓として用いる例が多い。秀能井は北郷方の禰宜であり、秀能井新輔が「野田新助」の通称で呼ばれたことは十分に考えられる。ならば、その「新助（新輔）」は一体誰なのか。先の天河神社蔵の小面の銘記をも考慮に入れると、秀能井時守・市守のさらに幼少の弟、あるいは、秀能井時守ないし市守の息子がすなわち「野田新助」であったということは考えられないであろうか。一家のまだ若年（あるいは幼年）の者が打った面を、秀能井家を代表する立場にある時守・市守の兄弟が寄進したのが、天河神社蔵の小面である、という推測である。もし、この推測が当たっているとすれば、「野田新助」の活動時期は、『仮面譜』が伝える「太閤時代」よりかなり下ることになる。

惜しむらくは、野田新助の確実な作例が僅か一例しか見出せない点である。とりわけ、彼が得意にしたという狂言面の作例が一つもないことは、その面打としての真価を知る上で大きな障害となっている。関屋俊彦「大藏弥右衛門家藏『預ヶ道具覚帳』について」〔続狂言史の基礎的研究〕(二〇一五年、関西大学出版部)所収が紹介する享保三年(一七一八)十二月付の狂言大藏家『預ヶ道具覚帳』には、同家所藏の狂言面の一つとして「さ、い 野田作」が挙げられている。恐らく野田新助作の面なのである。狂言大藏家にもその作が伝わっていたことが知られる。今後、具体的な作例が出現することを期待したい。

〔大宮大和〕

大宮大和は井関河内門下の名工で、主に江戸で活躍した。喜多古能の『仮面譜』は、大宮大和につき、

河内弟子 サネモリ 法名木工人、初南都ノ社人由、後武州江
大宮大和真盛 戸ニ住ス、寛文十二年死、百二十六年

と記しており、寛文十二年(一六七二)の没という。この記事は概ね『大野出目家伝書』の次の記事に拠っているらしい。

武州 大宮大和 木入

寛文十二年四十二歳ニテ死ス、九十九年ニナル、生年ヨリ百四十一年ニ成

南都社人也、河内弟子トナリ面打ト成

もつとも、大宮大和の諱が「真盛」であったという点については、具体的な典拠を明らかにしえない。

一方、大宮大和がもつとも「南都ノ社人」すなわち南都春日社の禰宜であったことは、『大野出目家伝書』がその直接の典拠であると思われる。実際、春日社大宮神主方に属する北郷禰宜には「大宮」を姓とする禰宜の家系が複数あり、大宮大和の出自が春日社の禰宜であった可能性は十分に考えられよう。

本稿では、これを補強するもう一つの資料として、金春家文書の『歌舞拾得集』（金春安明氏蔵の存在を指摘しておきたい。同書は江戸後期の金春安住が能関係の様々な書物を集めて書き写した大部な能伝書で、巻二・巻五の二冊のみが現存する。巻二は主に大蔵庄左衛門家蔵の伝書の写しを収めており、その中に、「大蔵太夫秦経（花押）／元禄十年三月日」と奥書のある『金春大蔵家之面覚』と題する一書が含まれるが、そこに次のような記事が見られる。

大和 後木入ボクニウと云

右大和ハ春日乃禰宜にて有し也、細工よく候間、面打に成、江戸住居仕、江戸にて終り候也

同書は『仮面譜』よりも百年ほど時代が遡る、大宮大和の活動期からさほど隔たらない時期（元禄十年（一六九七）の成立で、より信憑性の高い資料であるが、そこにも、大宮大和が「春日乃禰宜」であったと記されており、彼が春日社禰宜の出身であったという説は信じてよいように思われる。

大宮大和の伝記に関しては、『清閑寺熙房卿記』（国立公文書館内閣文庫蔵の万治元年（一六五八）十一月十一日条に、「面打藤原基満 任大和太掾、職事昭房」として、大和太掾受領の記事が見えることが知られている。注4注目されるのは、ここに大宮大和の名乗りが「藤原基満」とあることで、この点もまた、大宮大和と春日社禰宜との関わりを物語つていよう。すなわち、前記「家系」によれば、大宮神主方の北郷禰宜の過半が「藤原」を本姓としており、その中には榊原家のように、諱に「基」の通字を有する家系もいくつか見られるからである（藤原基憲・基久・基房など）。大宮大和は、これら北郷禰宜の系譜を引く人物であった可能性があるであろう。そして、彼が授かった「大和太掾」の受領号にも、大和出身という彼の出自が大きく関係しているであろうことは言うまでもない。一方、『仮面譜』が伝える「真盛」という諱については、他に確たる証拠を見出すことが出来ない。具体的な依拠資料が明らかになるまでは、大宮大和の名乗りは「基満」とするのが無難であろう。

『大野出目家伝書』によれば、大宮大和の生年は寛永八年（一六三二）。彼がいつまで奈良に居住していたかは不明ながら、その後、江戸に移住することで、彼の活躍の場は大きく広がることになる。現在、大宮大和の作例は各地に多く残されており、泉屋博古館蔵小面、彦根城博物館蔵小面・長霊癒見、国（文化庁）蔵泣増など、枚挙に暇がない。これらはいずれも「天下一大和」の丸型焼印が捺された作例であるが、鍔仙会蔵瘦女のように、瓢箪型の焼印を捺した作例も僅かながら存する。

「梅岡次郎兵衛」

梅岡次郎兵衛について従来知られている情報は、喜多古能の『仮面譜』に「近江弟子」として「梅岡次郎兵衛 江戸ニ住ス」と挙がっているのがその全てであった。すなわち、同書によれば、梅岡次郎兵衛は京住の面打児玉近江の弟子で、江戸で活動したという。彼の名は、『面打秘伝書』や『大野出目家伝書』などにも記載がなく、よって『仮面譜』の右の記事は、これまで全く検証されることがなかった。

しかるに、前記『歌舞拾得集』巻二所収の元禄十年奥書『金春大藏家之面覚』には、先の大宮大和の条に続いて、次のような記事が見られる。

一、春日乃禰宜野田乃次郎兵衛打、同喜兵衛打と云有

右に言う「野田乃次郎兵衛」が梅岡次郎兵衛と思しく、これによれば、彼もまた南都春日社の禰宜であったことになる。前記『家系』には梅岡姓の禰宜の存在が確認されないものの、貞享四年（一六八七）刊の地誌『奈良曝』には、「禰宜役者」として「本高島町 脇 梅岡次左衛門」の名が見え、江戸前期には梅岡姓の禰宜がいたことが知られる。右に「野田乃次郎兵衛」とあるのも、彼が春日社禰宜のうち北郷方の禰宜であった事実を示唆するものであろう。

実際、梅岡次郎兵衛は、『仮面譜』が伝える「江戸」ではなく、奈良の住人であった。右の『奈良曝』「諸職名匠」の項には、梅岡次郎兵衛の名が次のように見える。

面打

坊屋敷六軒屋町

寛見玉近江大掾弟子

梅岡二郎兵衛

これによれば、梅岡次郎兵衛は奈良の坊屋敷六軒屋町に住していたことになる。『仮面譜』がその梅岡を江戸の居住としたのは、確たる証拠があつたわけではなく、喜多古能の祖父喜多十太夫定能が公儀に提出した「喜多十太夫書上」（享保六年書上）の「十作之時代」に、「私養父代、兄玉近江与申候面打之弟子、梅岡次郎兵衛与申者罷在、右之次郎兵衛所持仕候を写置申候」とあることからの連想に過ぎないのではなからうか。すなわち、右は十太夫定能の養父にあたる喜多成能が梅岡次郎兵衛所持の面伝書を借り受けて書写した事実を示しているが、そこから、梅岡次郎兵衛もまた江戸の住であつたろうという連想が働いた結果かと思われる。しかしながら、梅岡次郎兵衛が江戸住であつたことを示す傍証は何一つない。右の『奈良曝』に従つて、奈良住の面打とするのが妥当なのである。なお、『奈良曝』「諸職名匠」の別の箇所には、

茶人つくろい

坊屋敷六軒屋町

梅岡二郎兵衛

とあり、梅岡次郎兵衛は面打であると同時に、「茶人つくろい」の看板をも掲げていたらしい。坊屋敷六軒屋町は春日社禰宜の居住地である野田町・高島町からは遠く離れた町人町で、彼は春日社の禰宜としての勤めもそこそこに、面打・茶入繕いの作業に精を入れる日々を送つていたのであろう。

梅岡次郎兵衛の実作例はほとんど知られていない。草深清「大藏家狂言面と小瀬家文書」（『芸能史研究』九十五号、

一九八六年)が、小瀬家蔵(東京国立博物館寄託)の狂言面の一つとして、「梅岡次郎兵衛作」と箱書きのある通円の面を紹介しているのが数少ない作例である。小瀬家は代々金融業を営む奈良町の町人。幕末・明治期の当主小瀬孫作は森川杜園に師事して狂言の稽古を行う素人役者であったが、その孫作が明治十五、六年頃に狂言大蔵家の所蔵面を譲り受けた中に、右の通円面が含まれていたという。

この通円は、乱杭状の歯列がやや滑稽味を感じさせるものの、狂言面らしからぬ、端正で上品な表情の面で、面裏は横方向の刀目を基調とし、薄く茶褐色の拭漆を施している。焼印や銘記はなく、作者不明だが、この面を収める面箱の蓋裏には次のような墨書が記され、大蔵弥太郎虎文が文政六年(一八三三)付で梅岡次郎兵衛の作と極めている。

通円面 親梅岡次郎兵衛

作無相違者也

文政六年霜月

二十代目

大蔵弥太郎虎文

極之 中村(花押)

この極めの当否はもとより不明だが、梅岡次郎兵衛の作について考える上で一つの指標とはなる。

この他、ドイツ・ライプツィヒのグラスシ博物館にも、梅岡次郎兵衛の作と思しき二面が所蔵されている。(注5)一つは

「老女今春面写」と付札のある老女面、もう一つは「そう今春面写」梅若次郎兵衛打「梅若」は「梅岡」の誤記であろうと付札のある増女面

である。ともに面裏に焼印・銘記はないが、両目の裏の割り方が小振りのきれいな円形になっている点^(注5)が先の通円面とも共通し、それが梅岡次郎兵衛の作面の特徴であったのかも知れない。

右の通円面が狂言大藏家の旧蔵と伝えるように、梅岡次郎兵衛は大藏家と関係が深かったようである。野田新助の項で触れた狂言大藏家『預ヶ道具覚帳』にも、同家蔵の狂言面として「じや口 梅岡作」が挙がっており、大藏家には通円の他にも梅岡次郎兵衛作の面がいくつか所蔵されていた。宝曆名女川本狂言伝書『萬聞書』（檜書店蔵）には、近世の面打の一人として「大藏弥右衛門弟子」の「次郎兵衛」の名が挙がっているが、この「次郎兵衛」が梅岡次郎兵衛のことであれば、彼は大藏弥右衛門に師事して狂言をも学んでいたことになる。

梅岡次郎兵衛の生没年は不明である。前記通円面の箱書には、「親梅岡次郎兵衛」とあり、次郎兵衛が親子二代にわたって面を打っていた可能性を示唆する。ただし、梅岡次郎兵衛の二代目については全く知るところがない。なお後考に俟ちたい。

おわりに

以上、南都春日社の禰宜衆であったと思われる四名の面打の事跡を検討してきた。『仮面譜』などの文献資料によつて春日社の禰宜であったことが確認されるのはこの程度であるが、面作を手掛ける禰宜はまだ他にもいたようである。例えば、野田新助作の小面を伝える吉野の天神社には、次のような刻銘を有する山姥面が所蔵されている。

奉寄進

天川弁才天女

藤原守盛敬白

これは藤原守盛なる人物が寄進した面で、作者もまた同人であると思われる。この藤原守盛については知るところがないが、藤原姓を名乗り、「守盛」のように「守」字を含む諱を持つ人物は、北郷禰宜に多かった。前述の秀能井

家もその一つであり、同家の江戸中期の当主には「守衛」「守尹」「守富」などの名前が並んでいる(「家系」)。「家系」所収の秀能井家系図に「守盛」の名は見られないものの、前記「春日藤原禰宜系図」乙本には、秀能井時守・市守兄弟に次ぐ「三男」として「守盛」の名前が見え、これが山姥面の作者「藤原守盛」と同一人物であった可能性もある。江戸初期の野田新助との関係は定かではないものの、秀能井家と面作との深い繋がりが窺われる。

この他、天正期に活躍した面打山田喜兵衛も、南都禰宜衆との関係が予想される人物である。山田喜兵衛は大藏虎明の『わらんべ草』に、長命徳右衛門伯父の狂言面打「だんまつま」の弟子として見える人物。面裏に「叶」の一字を刻むのが特徴で、その刻銘を有する作例が現在十四例ほど知られている(注6)。このうち、天河神社蔵の狸々は彼の代表作として有名で、「天正十九年正月六日／ヤマタ□キヒヤウエ作／年老五十八歳」との銘記があり、山田喜兵衛が五十八歳の時の作と知られる。その作者銘の「ヤマタ□キヒヤウエ」には難読の一字が含まれ、この一字は「門」と読まれることが多いが、「門」では意味が通じず、これを「ヤマタ川」と呼んで、南山城の山田川に因む苗字かとする説もある(注8)。山田喜兵衛の面打の師匠「だんまつま」が、南山城を拠点に活動する長命徳右衛門の伯父であることを踏まえ、彼もまた南山城と縁の深い人物だと推測したものである。しかしながら、南山城相楽郡には「山田」の村名はあるが、「山田川」の村名はなく、苗字を山田川と見るのは難しい。『わらんべ草』などの文献資料からも、喜兵衛の姓はやはり「山田」であったと見る他ないであろう。

ここで注目されるのは、先に触れた『歌舞拾得集』巻二所収の元禄十年奥書『金春大藏家之面覚』に、「春日乃禰宜野田乃次郎兵衛打、同喜兵衛打と云有」と見えることである。すなわち、この「同喜兵衛」が山田喜兵衛を指すらしく、『金春大藏家之面覚』は、彼もまた「春日乃禰宜」であったとしているのである。現に南都禰宜衆の中には山田姓の禰宜が何家かあった。『奈良曝』には狂言方の禰宜役者として「山田理右衛門」の名が、『家系』には南郷禰宜

として「山田鉄丸采女春佐」「山田騰采女春肥」「山田新采女春嘉」の三家の系譜が挙がっている。天正期の南都禰宜衆は南山城の長命座の役者と共演する機会が多く、そのために南山城相楽郡山田村住の喜兵衛を南都禰宜衆と誤認したということも考えられなくはないが、山田喜兵衛が南都禰宜衆ではなかったことを示す明確な証拠もまた見当たらない。彼が南都禰宜衆の面打であったことは十分に考えられよう。ここに一つの可能性として提示しておきたい。

南都禰宜衆の演能活動の活発化に伴い、禰宜衆の中にも面作を手掛けるものが少なからず現れた。そのことは、近江の井関家、越前の出目家と並び、南都においても面制作の伝統が脈々と受け継がれていた事実を物語っている。本稿で取り上げた四名は互いにそれぞれ師弟関係を結んでいた形跡もなく、井関家や出目家のような代々継承される面打の有力家系を創出するには至らなかつたが、近世初頭の能楽の隆盛を側面から支える存在として、彼ら南都禰宜衆の面打がいたことは、能面制作史の一断面として記憶しておく必要があるのではなからうか。また、南都禰宜衆が勝れた狂言役者を陸続と輩出したという歴史を反映し、野田新助や梅岡次郎兵衛のように、狂言面を数多く手掛ける面打の活動が目立つ点も特筆すべきである。すなわち、狂言面の形成過程を明らかにする上で、彼らの活動は決して無視することの出来ない重要な意義を担っていたと考えられるのである。その実態解明にはなお多くの作例を集める必要がある。今後の課題としたい。

注

(1) 『仮面譜』の成立」、『能楽研究』三十八号、二〇一四年)、「面打ホウライ考」、『能楽研究』三十九号、二〇一五年)、「面打井関考」、『能楽研究』四十号、二〇一六年)、「面打井関備中守追考」、『能楽研究』四十三号、二〇一九年)、「面打角坊考」、『能楽研究』四十三号、二〇一九年)参照。

- (2) 『大野出目家伝書』の本文は、文化四年(一八〇七)に金春安住が書写した金春家本(金春安明氏蔵)に、『仮面譜』の本文は同書版本に拠った。
- (3) 『面目利書』の本文は、明治三十三年に横井時冬所持本を書写した東京大学史料編纂所の所蔵本に拠った。
- (4) 中村保雄「江戸初期の能面作者たち(上)」(『わかめ』六号、一九七九年、耕春舎)、同「世襲面打家の経緯について」(『京都文化短期大学紀要』十五号、一九九一年)に指摘があるが、元になっているのは安田富貴子氏による調査と思われる。安田富貴子『古浄瑠璃―太夫の受領とその時代』「諸職受領関係資料」(一九九八年、八木書店)参照。
- (5) Tom Grigull『Japanische Larven und Masken: Eine Leipziger Sammlung, die Tokugawa und die Daimenbutsu-Sarugaku in Kyōto』(二〇一一年、ミュンヘン・ルートヴィヒ・マクスシミリアン大学文化学専攻博士論文)。
- (6) 田邊三郎助「能面芸術の形成」(『論集日本の仮面』(下巻)(二〇一九年、中央公論美術出版)所収)参照。
- (7) 野上豊一郎『能面論考』(一九四四年、小山書店)、田邊三郎助「能面芸術の形成」など。
- (8) 菅居正史「大和の能面」(『大和の能面』(一九九六年、保育社)参照)。